

中海浅場機能基本調査

(宍道湖・中海水産資源維持再生事業)

道根 淳

1. 研究の目的

中海本庄水域においては、西部承水路の撤去、森山堤の開削が予定されており、これが実現すると魚介類の移動可能な中海最大の浅場になることが想定される。また堤防開削により、閉鎖性水域であった本庄水域の環境に変化が生じ、さらには中海の魚介類資源に大きな変化が生じることが予想される。そこで、アサリ等有用魚介類の開削前後の資源状況および環境の変化を把握するとともに、これら資源の増殖方法や有効利用方法について検討する。

2. 研究方法

(1) 漁業実態調査

有用魚介類の季節変動を把握するために、枴網、刺網、採貝各漁業において標本船野帳調査を行った。また、松江市本庄、東出雲町地先に設置してある枴網の漁獲物の買取り調査を月1回実施し、大きさ(mm)、体重(g)の計測、主要種については雌雄の判別を行った。

(2) アサリ・サルボウガイ分布生態調査

中海におけるアサリ・サルボウガイの分布状況を把握するために、スミス・マッキンタイヤー採泥器による採泥を6回/年(奇数月に実施)を行った。調査点は、本庄水域に8定点、中浦水門～境水道に3定点、中海南岸に3定点設けた。採泥後、目合1mmの篩で選別後、試料は10%ホルマリンで固定し、持ち帰った後、アサリ、サルボウガイの選別を行った。

(3) サルボウガイ天然採苗試験

大根島東沖、東出雲町崎田鼻沖に採苗施設を設置し、8月から12月にかけて天然採苗試験を行った。採苗器は水深1、2、3、4mの各水深帯に設置し、付着基質にはパールネット、底びき網ならびに定置網の古網を使用した。

3. 研究結果

(1) 漁業実態調査

標本船野帳調査より、刺網ではスズキ、ボラが、枴網において、本庄水域ではマハゼ(冬季)が、中海ではスズキ、サッパ、コノシロが、美保関ではスズキが漁獲の主体であった。また、刺網における漁場利用では、季節により漁場を使い分けている傾向がうかがえた。

漁獲物買取り調査より、本庄、東出雲各地先における魚類の出現状況は同様な傾向がうかがえた。スズキ、マハゼは周年出現し、サッパは春から秋にかけて出現し、冬季にはほとんど漁獲されなかった。また、モクズガニは東出雲地先での出現が高かった。

(2) アサリ・サルボウガイ分布生態調査

現在、解析中。

(3) サルボウガイ天然採苗試験

付着稚貝は8、9月に多く見られ、大根島東沖では水深3-4m、東出雲町崎田鼻沖では水深2-3mでの付着が多かった。

今回の試験ではアサリ稚貝も採集され、特に東出雲側での採集数が多く、8-10月にかけて多く見られた。